



全教員で、つまずきの要因を分析

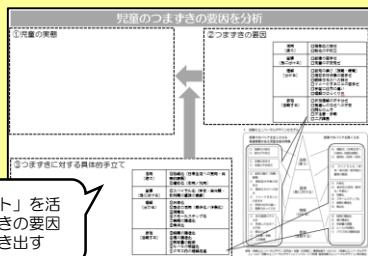
活用 (使う)	<input type="checkbox"/> 抽象化の弱さ <input type="checkbox"/> 一般化の不成立
習慣 (身に付ける)	<input type="checkbox"/> 記憶の苦手さ <input type="checkbox"/> 定着の不安定さ
理解 (分かる)	<input type="checkbox"/> 認知の偏り (視覚・聴覚) <input type="checkbox"/> 複数平行作業の苦手さ <input type="checkbox"/> 曖昧なものへの弱さ <input type="checkbox"/> イメージすることの苦手さ <input type="checkbox"/> 学習に仕方の違い <input type="checkbox"/> 理解のゆっくりにさ
参加 (活動する)	<input type="checkbox"/> 状況理解の不十分さ <input type="checkbox"/> 見通しのなさへの不安 <input type="checkbox"/> 関心のムラ <input type="checkbox"/> 不注意・多動 <input type="checkbox"/> 二次障害

児童のつまずきの要因をユニバーサルデザインの視点に照らして分析

児童の学習の様子(動画)を見ながら分析



テストやノート、日記、図工の作品など、様々な資料から分析



「要因分析シート」を活用して、つまずきの要因から手立てを導き出す

児童の実態を多面的に把握
 学力調査の結果
 テスト・ノート・宿題
 学習の様子(動画)
 日頃の生活の様子
 掃除・クラブ・委員会
 前年度までの状況
 家庭環境 等



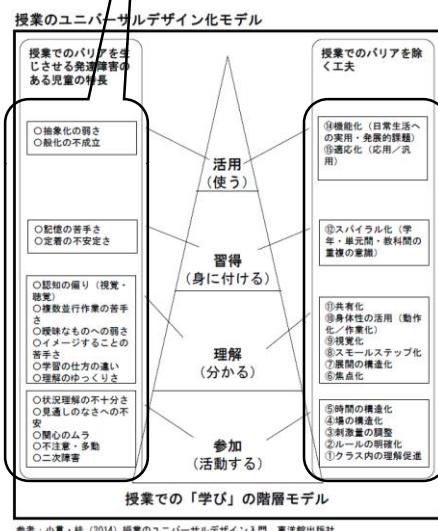
わからない・できない

成果

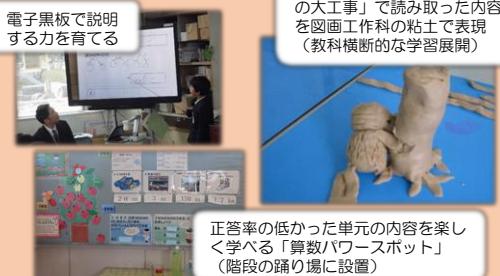
課題のあった領域で研究授業を行った結果、正答率が向上

学年	領域	問題の内容	全国平均との差		H30との差
			H30	H31	
1	数と計算	減法の問題づくり	22.4	39.2	+16.8
2	量と測定	身近にあるかさの単位の理解	2.2	17.1	+14.9
		読むこと(国語科)	-8.4	7.8	+16.2
3	量と測定	道のりの意味理解	-12.8	-0.8	+12.0
4	面積	複合図形の面積を求める式を選ぶ	-9.5	3.0	+12.5
5	数と計算	小数倍の文章問題を解くための除法の式を選ぶ	-18.0	-4.8	+13.2
6	数と計算	基準量が分数の場合の比較量を求める	-10.9	6.3	+17.2

ユニバーサルデザインの視点を活用



その他の実践事例



国語科で学習した「ピーバーの大工事」で読み取った内容を図画工作科の粘土で表現(教科横断的な学習展開)

正答率の低かった単元の内容を楽しく学べる「算数パワースポット」(階段の踊り場に設置)

手立て

授業研究



学習意欲を喚起させる導入の工夫

問題理解を促す教材・教員の工夫

児童の思考を焦点化させる発問の工夫

児童の思考を促すICT機器の活用

活用 (使う)	⑭機能化(日常生活への実用・発展的課題) ⑬適応化(応用/汎用)
習慣 (身に付ける)	⑫スパイラル化(学年・単元間・教科間の重複的意識)
理解 (分かる)	⑪共有化 ⑩身体性の活用(動作化/作業化) ⑨視覚化 ⑧スモールステップ化 ⑦展開の構造化 ⑥焦点化
参加 (活動する)	⑤時間の構造化 ④場の構造化

つまずきの要因に対応した手立てをユニバーサルデザインの視点から考える

学校全体として



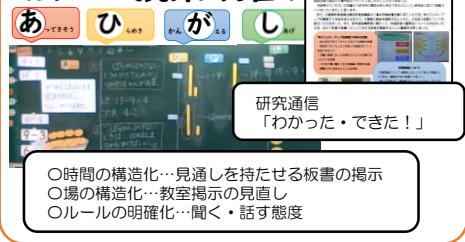
基礎的・基本的な学力定着のための「音声計算」

「聞く」力を高めるための「聞き耳タイム」

「読む」力を高めるために子ども新聞を読む

学習規律の徹底ガイドブック「学問のすすめ」

すぐに実践 広がる授業改善!



○時間の構造化...見通しを持たせる板書の掲示
 ○場の構造化...教室掲示の見直し
 ○ルールの明確化...聞く・話す態度

個に対する支援



TT等による低学年への丁寧な支援

地域ボランティアによる学習支援

放課後の学力補充教室



落ち着いて学習に取り組むための環境づくり

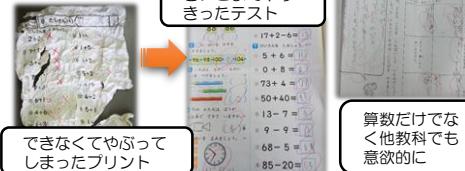
「学習のルール」の掲示 学習の内容を自己決定

音読や計算カードを丁寧に聞くことを通して、児童に寄り添う

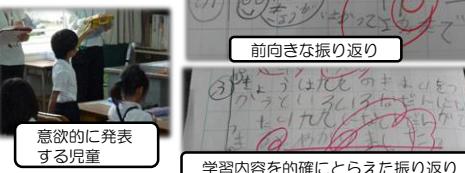
児童が自分のがんばりを実感できる「ふりかえりカード」

児童の変容

★つまずくと、投げやりになってしまう児童が、最後までやりきれようになった



★学習に前向きに取り組めなかった児童が、意欲的に取り組めるようになった



★読み取り問題や、基礎的な計算問題の定着が難しかった児童が、自信をつけてきた



★高学年児童でも、日々の課題をやりきることで、学習に意欲的になり、学力の向上もみられた

研究体制

1年目

- ・児童のつまずきを多面的に分析
- ・授業分析の視点の焦点化
- ・課題のある児童に焦点を当てた見取り

2年目

- ・系統性を意識した研究協議
- ・ユニバーサルデザインの視点を活用したつまずきの要因分析
- ・汎用性の高い学習指導案の作成

3年目

- ・研究授業の成果から日々の授業改善へ
- ・指導事項から手立てを焦点化
- ・公開研究会(研究成果・取組実践の普及へ)

今後において...

- ・研究推進体制の継続
- ・全教職員での組織的な取組
- ・日々の授業改善につながる研究授業
- ・放課後等の学力補充

